



Title	「ゼロからの出発」で始めた保育所づくりにおける子ども理解形成についての一考察 : 1960年代保育所づくり運動頃の子ども理解
Author(s)	美馬, 正和; Mima, Masakazu
Citation	子ども発達臨床研究, 18, 43-51
Issue Date	2023-03-31
DOI	https://doi.org/10.14943/rcccd.18.43
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/90592
Type	departmental bulletin paper
File Information	070-1882-1707-18.pdf



「ゼロからの出発」で始めた保育所づくりにおける

子ども理解形成についての一考察

-1960年代保育所づくり運動頃の子ども理解-

美馬 正和

A study on the formation of children's understanding in the creation
of a nursery school that started with "starting from scratch"

Masakazu MIMA

【目次】

I.問題と目的

II.方法

III.結果及び考察

1.A氏の活動と時代背景

【無認可保育所を立ち上げるまで】

【無認可保育所を立ち上げてから認可が取れるまで】

【A氏の子どもの捉え方】

2.保育園での取り組み

【保育園で掲げた子ども像】

【開園当初の保育実践から】

IV.結論

V.文献

I. 問題と目的

現在「子ども理解」や「幼児理解」は保育の基本として捉えられている。(以降「子ども理解」で統一) そのため、保育実践を行っている保育者や保育士を目指して保育士養成校に通っている学生などにとって「子ども理解」は、聞き慣れた言葉であるだろうし、子どもを理解することは、当たり前の事であり、子ども理解をしなければならぬものと認識をしている人も多いのではないだろ

うか。

この「子ども理解」について、青木(2001)は「2000年に改訂された教育職員免許法の一部に、必修科目として『幼児理解の理論及び方法と教育相談(カウンセリングに関する基礎的な知識を含む)の理論および方法』の学習内容が新たに加えられた。教育相談が保育者養成の内容に位置づけられたのは初めてのことである。子どもを理解し、確かな自己を形成する環境を用意することが、21

世紀の教育の出発点として再確認された意義は大きい」としている。この時から「子ども理解」が科目として登場して、20年以上が経過し、現在は「幼児理解の理論および方法」という科目になって、保育者養成の中で定着していったといえるだろう。

しかし、この「子ども理解」は保育の領域では専門用語であるにもかかわらず、保育の専門辞典には独立して定義されていないと川田(2021)は指摘している。

2000年の改訂以前、科目として「子ども理解」が保育者養成の中で扱われてはいなかった時、保育者は子どもをどのようにみていたのだろうか。

そこで、本稿では保育所づくり運動時代に共同保育所を立ち上げ、共同保育所から認可保育園になり、その保育園の園長を長きにわたって行ってきた方の語りから、子ども理解について考えていきたい。

II. 方法

1960年代に無認可保育所を立ち上げ、その後認可を取って認可保育園の園長をされてきたA氏にインタビューを行った。インタビューは3回実施。時間は2時間程度であった。

A氏のプロフィール

1936(昭和11)年生まれ

1955(昭和30)年：大学入学

1959(昭和34)年：社会福祉科卒業、卒業後私立小学校勤務

1960(昭和35)年：結婚

1966(昭和41)年：札幌へ移住

1968(昭和43)年：共同保育所設立

1973(昭和48)年：認可がおりて認可保育園として開園

2002(平成14)年：定年退職

III. 結果及び考察

1. A氏の活動と時代背景

【無認可保育所を立ち上げるまで】

A氏がご主人の仕事の都合で札幌へ移動された

頃、学生運動が70年安保闘争へと激化していった時代に当たる。A氏が引越しをした近所では学生紛争が活発に行われ、ヘルメットを被り、鼻血を垂らした青年が民家に転がり込んでくるような場所であった。A氏はこのような環境の中で、平和運動に刺激を受け「札幌ベトナム話し合いの会」を発足させ、月に一度集まり戦争をやめさせるための声を集めていた。そのような活動を行っている中で、パリ会談が行われ、札幌ベトナム話し合いの会は縮小していくことになる。

そのような中、A氏は保育所づくり運動に出会い、思いがけない出来事で無認可保育所を立ち上げていくのである。そのきっかけは、A氏が近所の大学で子どもを遊ばせていた時、お腹の大きな女性が数名歩み寄ってきて「子どもを預かって欲しい」と言ってきたのである。

ある日、子どもを遊ばせているとお腹の大きい3人の女性が「産んだらすぐに預かってくれないか」と声をかけてきた。曖昧な返事をするとう「自分の子を3人も育てているあなたなら4人も、5人も育てるのは同じでしょ」と詰め寄られた

このことから、A氏は働く女性たちの声を聴き、思いや現状を知っていくのである。

大学院を出る女性は仕事が無かった。今でもね、男性教授が多いでしょ。皆無だったんですよ。70年に一人か二人、そういう時代ですよ。ということは女性の地位向上、女性が働くそれも働き続けて、男性と同じように社会で女性が生きていくという、そういう時代が、わーっと学生運動だけじゃなくて、女性達、強かった。…その時代に働き続けたい、それから大学で研究をしている女性達は地位向上という願い、そして銀行に勤めている、国鉄に勤めている、普通の事務所に勤めている、郵便局に勤めている、電電公社に勤めている、いろんなところの女性と一緒にあって、やっぱり生まれて産休明けて43日目に職場に出なければ、机を取られてたんだって。そういう経験を、いっぱい話を聞かせてくれる女性達が集まってきて…

語りにあるように、当時の働く女性たちは、産休明け 43 日目に職場に出なければ、机を取られるという。そのような状況であったとしても、子どもを遊ばせている見ず知らずの人に、生まれて間もない自分の子どもを預かって欲しいと訴えるということは、当時の働く女性の切羽詰まっている様子を物語っているのではないだろうか。

この当時の日本は、男性が中心の社会であり、女性が仕事をする事も快くは思われていなかった時代である。諏訪(1970)は「婦人がどんどん働きに出ていく状況の中で、『婦人よ家庭に帰れ』とか『母性愛の欠如が少年非行のもと』と繰り返し言われる。それならいっそのこと、一千万人婦人労働者は一斉に家庭に引き上げてしまったら、どんなものだろう。『家庭で家事・育児に専念する』という女子の本務を忘れ、母性を喪失した女とか、これも『戦後に強くなったものは靴下と……』の一種だとか、だからこそ女子には家庭科教育が不可欠であるとかいわれて、誰があくせく働きたいのですか!と叫べるものなら叫んでもみたい。」と記述している。また、村山(1979)は「60年代を迎え保育所づくり運動は“ポストの数ほど保育所を”というスローガンを掲げて一層活発化していったのである。この動きに対して、政府関係者は、人づくり政策を背景にして、家庭教育第一主義を強調して、“婦人よ家庭へ帰れ”のスローガンをかけて、保育所要求をおさえる姿勢を示していた」とある。婦人労働に対して身勝手な議論が起こり、風当たりの強い時代であったことがこれらの記述からもわかる。

【無認可保育所を立ち上げてから認可が取れるまで】

A氏は実際に共同保育所を設立していく。A氏を含めた3名の自宅の一室を保育所としたのである。

当時A氏が住んでいた札幌市の状況としては、ゼロ歳児を保育する保育園は少なく、産休明けから子どもを預かっていたのは殆どが無認可保育所であった。無認可保育所を運営するにあたって、全国の動向を見るために京都、名古屋、東京など

の保育園を見て歩いたという。A氏が無認可保育所の看板を掲げると、始めは3人の子どもたちだったが、すぐに増えていったのである。

無認可(保育所)を始めて子どもが15人、20人、50人に最後、5年間で3人から50人になっちゃった。それが0(歳).1(歳)だけ。そういう時代。というのは時代的にわかるよね。厚生省が認めてないんだから。あの、産休明け43日目からっていうのを認めてないんだから、認めても6か月から。それも、数カ所しか入れてなかったという時代。

無認可保育所を立ち上げてから、5年が経過した時、その当時にA氏が作成した冊子には、この当時の産休明け保育については以下のように記載されている。

子どもが生まれても働かねばならない婦人、働き続けたいとねがう婦人にとって、「産休明け」から入所できる保育所がないということは深刻な問題です。国や自治体が「産休明け」を認めず、特に0歳1歳児保育対策にたち遅れてきたことが原因で、働く婦人の多い都市ではいたるところに、父母と保母の手で共同保育所が作られ、「産休明け」は主にこれらの無認可保育所によって守られてきました。札幌市でも1967年来、5年間で8カ所共同保育所が次々とでき、そこで育った0歳、1歳児はすでに1,000名を超えています。どの共同保育所もそれぞれ苦しい運動の経験を持っておりませんが、国や自治体の貧しい保育行政に目を向け、よりよい保育を目指して、父母と保母が手をつなぐ場となり、0歳、1歳児の貴重な保育実践を出す場として、全国の「無認可」の仲間と共に頑張ってきました。「0・1歳児の保育実践(1972)」

これは1972年に発行された冊子「0・1歳児の保育実践」に記載されている文章である。無認可の共同保育所づくりは、全国的なものであった。産休明け保育の需要はあるものの、当時のゼロ歳児保育については6ヶ月児からの入所であったた

め、産休明け保育は無認可の共同保育所が担っていたのである。A氏が住んでいた札幌市も同様で、乳児が入所できる園は4箇所であり、産休明けからではなく、6ヶ月児からであった。

無認可の乳児の共同保育所として立ち上げ、入所希望の連絡はどんどん来ていたようである。預かる子どもの数が増えていく中で自宅の一室では手狭になり、場所を転々としながら保育を行っていた。そのうちに入所している子どもは50名になり50名以上は預かれない状態にもかかわらず、それでも電話が入り、「トイレの前でも廊下でもいいから入れてくれ」という保護者からの連絡があったようである。このように引っ越しを繰り返す中で、親たちから認可保育園を作る運動が始まったのである。

親と一緒に作らないと保育園ができない。…どこも全然お金が無い頃に、子どもだけ増えた。…署名を百何人か取ってね、1万なんぼのね、お金を集めてね、札幌市に鉄西地区と言っていた頃、鉄道の西だから、鉄西地区に保育所をとという運動をやることにしました。これは親達なんです。…親達がお金を集めて、5円からね、…最高で20万円止まり、その20万を出した人は理事に、お金の無い人も、親せきや友達や親から貰って20万持っている人で15人、理事を15人集めたのはうちだけです。普通は7・8名で成立するんですよ。なんでかっていうとお金が欲しいから、20万×15人だもの、建築費足りないからね…寄付金は、普通だったら500万、500万、500万くらいでいいでしょ。5円からだから、みんな書けないよね。だから誰からに固めて印鑑を押してもらった。それに通帳の残高証明が必要なんです。残高証明が無いものばかりが寄付をしている。なんで固めてね、話し合って、残高証明ある人は、その人に50万、寄付していなくても、みんなを集めて代表になってもらった。それで引っ越しをして、保育園が建ったのが1973年なんです。

親たちから始まった保育所づくり運動。署名を集め、寄付金を集めていた時のエピソードである。

更には、近くに大学があったため、研究者が保育園立ち上げに協力をしていた。

教育学部のW先生という人がいた。それからS先生が教育学部にいた。M先生…農学部にいた。もう一人農学部の教授がいて、K先生。そういう人達が理事になってくれた。お医者さんも。教育学部の2人、S先生は教授だったの、W先生…この2人に理事になってもらった。理事になるには印鑑をもらわないとダメだからね、理事になるには、1年かかりましたよ、この理事を厚生省にOKもらうまで、それみんなやったの。一人で。何も知らずに。その時に、定款とか労働組合の規則をつくってくれたのがS先生だった。北星の教授だったね。だからS先生はほんと私の助っ人だった。全部、定款とか理事会に必要な書類、これくらいになってね

認可保育園になるまでには、市議員のところへ行ったり、議会への陳述をしにいたり、土地を探すために市役所へ行き交渉をして土地を無償で借りることができた。このような活動の末、無認可保育所を立ち上げてから5年が過ぎたとき、認可が下りて認可保育園として新たにスタートを切るのである。

この当時のことを小出(1992)は「無認可時代には、子どもが満二歳になると次の保育園を探さなければならない、転園した先での保育に満足できないなど、親の不満があった。…保育所づくり運動の高まりの中で『みんなの力でみんなの保育園を作る』機運へと発展し、土地探しから資金づくりまでの多くの人々の血のにじむような努力により誕生した保育園」としている。

ここまでA氏が認可保育園を立ち上げるまでである。A氏は保育園を立ち上げようとして立ち上げたわけではない。また、保育の仕事に就こうとしていたわけでもないのが語りから知ることができる。

【A氏の子どもの捉え方】

A氏は1974(昭和49)年に雑誌の取材を受けている。その時に以下のように述べている。

子どもを育てるということは個人的なことではありません。子どもは今よりもっとすばらしい社会を築く力を秘めている—そう考えたら、国の子どもだと思のです。…オギャーと生まれたそのときから、人はそれぞれのよいものを持っている。また、よくなろうとする心があります。(わたしの赤ちゃん3月号)

現在保育に携わっている人たちがこのように子育てが個人的なものではないと捉えているのだろうか。子育ては家庭のものであり、個人のもので捉えている人が多いのではないだろうか。そして、人はよいものを持ち、よくなろうとする心があると子どもを捉えて保育実践をしている人はどれくらい存在しているのだろうか。

そして、保育について素人だったA氏だが、働く母親にとって保育所が必要な場所であることは承知している。では、子どもにとってはどうか。このことについても以下のように語っている。

素朴な疑問として、まだわけのわからない乳幼児なんて集団保育の中では個性が失われてしまうのではないか。右向け右式の、やることなすこと皆同じなんて、無味乾燥の人間になってしまうのではないかと言う人もいました。…すばらしい保育の実践経験を持っている人の話も聞くことができました。…集団の中で、それが失われてしまうのではなく、それぞれの持つよいものを伝え合い、学び合っていくのです。悪いところ、遅れているところも集団の中で直し、集団のレベルに近づこうとする。それが集団のよさではないでしょうか。おとなの社会だって、すぐれた集団社会はそういうものではないでしょうか。集団と個というもの、それは乳幼児でも基本的には変わらないということをおたちは知ったのです。(わたしの赤ちゃん3月号)

この時代1960年代、1970年代は“集団”という言葉が流行していた時代であった。「一歩前保育」という言葉も使われていた。“集団”という言葉が多く使用されていたこの時代についてA氏は以下

のように語っている。

子どもでも家庭では出来ないことでも、子どもの仲間でこんなにやれるんだ。力つくんだ。私は感動しました。実際、感動するの。私が集団保育というのを耳について、…家だったらできない。でんぐり返しも家だったら出来ないかもしれない。だけど、他の子のやるのを見て、やってみようと思う。やってみようと思うのはお母さんじゃなくて、同じくらいの戦いたい仲間です。やってみたい、俺も負けないぞ、これが集団の力だと思っていた。その頃、保育問題研究会に行ってもどこに行っても、集団教育、集団保育が当たり前になっていた。この言葉はね。保問研の全国大会に行けば、集団主義保育、主義がついていた。これは否めないよね。その時代だから。

この当時は、集団主義保育や集団養護、乳児の集団保育など個か集団か、家庭か集団かという議論が多くされていた時代であったようである。

2. 保育園での取り組み

先に引用した小出の文章の中に「転園した先での保育に満足できない」とあるが、A氏が立ち上げた園ではどのような保育を行っていたのだろうか。次に保育の内容に焦点を当てていく。

【保育園で掲げた子ども像】

A氏立ち上げた保育園には、5つの子ども像が存在している。小出(1992)は「『保育所づくり運動』とは建物を建てることで完結することではない、みんなの願いと知恵を結集して保育内容を創造していくことも、保育所づくりなのではないか。」としているように、A氏の保育園では、保育者や保護者と一緒に保育方針等を作っている。

保育者たちとね、夜中、保育、保育園の保育方針、…あの(保育所保育)方針ではなくて、…どんな子どもを育てたいのかっていう、保育士、子ども作り、保育者が育てたいと思う子ども像を、そこにいた保育者と一緒に夜中、遅いときで11時まで。残業手当なんか出せないときですよ。…で、これはあの、そういう(保育所)保育指針とか教育指針(幼稚園教育要領)とかそういうなの関係なく、保

育者たちは一番子どもにどう育ててほしいのかって、話し合っって話し合っって、模造紙に何枚も書いて作ったのが、この1、2、3、4、5だったんですよ。

そこで作られた子ども像が次の5つである。

- 1 身体の丈夫な子
- 2 仲間を思い、仲間も自分も大切に
する子
- 3 自分で考え、正しいと思うことを
言えて、いきいきと行動できる子
- 4 働くことに喜びを感じる子
- 5 自然を愛する子

この5つの子ども像を当時の保育者たちと話し合い作り上げていった。この子ども像を作り上げていく際に、保育所保育指針を参考にしたのではなく、子どもたちへ期待から子ども像を作り上げていったのである。この子ども像に関しては、保育所保育指針を参考にしていないと語られているのだが、目指す姿として大きくずれている感じにも感じられない。その当時、保育者たちが見据えていた子ども像は、現代にも通じるところがあるのではないかと感じてしまう。その子ども像について、小出(1992)ではそれぞれの子ども像に説明を加えている。

- 1 身体の丈夫な子
大気汚染、食品・薬品公害、車の増加、自然破壊等が年々すすみ、乳児から老人までの健康がおびやかされている中で、いろんな活動を積極的にとりくむのに必要な「丈夫なからだ」づくりにはまず力を入れたい
- 2 仲間も思い、仲間も自分も大切に
する子
自分のことだけ考え、自己主張だけで、まわりのことまで考えない人間が増えてきているが、自分のことをしっかり考え、自分を大切にすると同時に、自分と関わるまわりの人たちに目や心が向けられる「人間づくり」

をしたい

- 3 自分で考え、正しいと思うことを言えて、いきいきと行動できる子
人の意見にすぐ流されることなく、いろんな問題に自ら関心を持ち、また自分の頭でよく考え、判断し、必要な時には発言し、行動していけることを目指したい
- 4 働くことに喜びを感じる子
「労働」を自分たちの周りの生活を、より豊かに意義のあるものに創りかえていく活動としてとらえ、子どもたちが遊びを通して積極的にものごとに取り組み力、全身を使って、手先を使って造り出す力を身につけたい
- 5 自然を愛する子

自然破壊が進み、生活にもうるおいがなくなってきたが、できるだけ「本もの」にふれる機会と環境をつくり、自然を守る気持、美しいものを美しく感じる心を育てたい

また、A氏も子ども像について語っている。

体の丈夫な子、仲間を思う子。仲間を思うだけじゃダメなんだと、仲間も自分も大事にする子。で、親に、親の考え通りにならないで、先生の思い通りにならないで、自分で考えて正しいと思うことはそれぞれ違うんだよ。自分の口で言えないとダメ。嫌だって。そうだって。ノー、イエスを自分の頭で考えて、口で言わないとダメなんだっていうのを考えて。そして、働くことっていうのは手を動かして自分で0、1は保育者にやってもらうけれど、2歳児になったらお団子こねられるよね、こねたら白玉団子をやけどしないように、ぼとんと入れるところ、これ作って食べるっていうかね、自分で作るの、こねてぼとん。で、このこねるのを2階の教室に、保育室に行ったらこれやる。もうそれをね、働くことっていうふうに、親が働いているんだから、子どもも働いて。これは手を使わないとダメ。

この保育園では現在でもこのような子ども像

に基づいて、保育目標などを立てていくのである。先の小出の引用の中に「人間づくり」という言葉が使われている。この保育園では、保育の対象は子どもであるが、相手は人である。子どもを人として育てていくことを中心に据えて保育を考えていたのではないだろうか。

では、具体的にどのような保育実践が行われていたのだろうか。

【開園当初の保育実践から】

女性が働き続けていくために、無認可で乳児の共同保育所を立ち上げ、認可保育園にしていたのだが、共同保育所を立ち上げたときから、子どもとのかかわり中から保育実践を考えていくことを行っていた。

ただ預かってミルクを飲ませてオムツを替えて離乳食をあげて時間を過ごすだけではなくて、保育実践をはじめからやっていた。…同じゼロからの教育、子どもはいきなり6歳になって教育じゃないんだよね。その前がある。その前から言ったらお母さんからあるんだよね。だけど、オギャーと生まれた子から、育てていくんだから、そこに保育者が、子どもにどうかかわっていったらいいのだからって。はじめから0・1しかいなかったから。0・1の保育実践を本とかを読んでの0・1ではなくて、実際に子ども、この子達と関わる中から保育、どうこの子達と、を一緒に育てていったらいいのかと。だから、保育者もゼロ歳ですよ。で、私自身もゼロ歳ですよ。みんなゼロ歳。だからゼロからの出発っていうのが、私の合言葉だった。…私の合言葉はゼロからの出発っていうのは、保育園を作る私自身もゼロ、保育者もゼロ、子どももゼロ。そこからどう作っていくかっていうね、本でノウハウをもらうんじゃなくて、実際から、っていうのがこの5年間の実践だった。

保育所ができて1年目。保育者も1年目。子どもも産まれてきて1年目。みんながゼロから始まるということを合い言葉にして保育を作っていたA氏。文献から学ぶだけではなく、実際に目の前にいる子どもから学んでいくことを行っていた

事例を語ってくれている。

1歳8ヶ月になってもお話をしない子、どうしんたんだろうな、「お母さんうちの子ども(A氏実子)2歳何ヵ月なんだけど、お宅の何ちゃんは1歳何ヵ月、両方ともあまりお話をしないから、二人揃って保健所に連れて行ってもいいですか」と言うと、お母さんは「いいですよ」って、うちの子と一緒にいったんですよ。うちの子は質問に何も喋らない、もうすぐ3歳になるのに。この子も喋らない。だけど質問者が外に出たらね、「山だ」と、自分から言ったんです。喋ったのね。…だからね、喋らないということがね、昔は障害を持っているとみなかった。…お母さん、お姉さん達がしゃべり過ぎる。これ当たっているよね。しゃべる前に、「お水」って言う前に「何欲しいの」って言っちゃうから。すぐに近くの幼稚園に入れなさい。3歳から入れなさいと言われて、幼稚園に行きました。1日目、「ボールを持って昼寝もしないでご飯も食べないで1日中、お母さん立っていましたよ。」だからね、保健所の方に教えてもらったのは、親がしゃべり過ぎる、お姉ちゃんがしゃべり過ぎる、言葉が育つ機会が無かったと知るわけですよ。

A氏の実子を含めて4名で始まった無認可保育所。その当時預かっていた子どもが喋らない。A氏の実子も喋らなかったということで、一緒に保健所へ相談に行ったエピソードである。そこで学んだことが、周りが喋りすぎることによって言葉が育つ機会が無くなっていた事を知ったのである。次は一緒に保健所へ行った子どものエピソードである。

Tちゃんの、なんで喋らなかったか。(両親)二人とも、獣医学部か。アメリカに研究に行つて実験をしている、二人とも。お父さんもお母さんも研究者で向こうで生まれた子がTちゃんだったの。そしたら向こうでね、ハイとかね、バイとかね、ママとかって言っているわけですよ。それを聞いて育てているわけよ。英語で。帰ってきてすぐに(保育園に)来たの。喋れないしょ。言語が違うの。…みんなね、ど

この子ども泣く時は「アアアア」って泣くって。その音はおんなじでも、ママって言うのとね、お母さんっていうのとね、ばあちゃんて言うのと、グランマって言うのとね、全然違うよね。バイとさよならとね。だから耳がね、英語に慣れているTちゃんが、来てすぐに入れた、そういうことにね、気づくってうかね、それが私たちの保育だったんですよ。で、気がついたのは、子どもは家庭だけで育つのではない。結局親がみんなとっちゃってたわけでしょ。あ、やっぱりお友達のいっぱいいる集団の中に入れないとダメだ。その時期集団っていう言葉がね、流行っていたから。家庭対集団だったから。学校も集団でしょ。だから、家族対集団なんですよ。

アメリカで生まれ、帰国後間もなく保育所で預かることになったTちゃん。Tちゃんの言葉が出ない事について、言語の違いに気づいたという事例である。現代の日本において、外国籍の子どもたちが保育園などに通うことは数として増えてきている。また、そのような子どもへ配慮をしていく事も色々なところで言われるようになった。そのようなことをA氏は1960年代に保育を通して経験をし、子どもを通して学んできているのである。A氏が「子ども理解」として子どものことを考えていたかどうかは、わからない部分がある。しかし、子どもの観察やかかわりから子どもを知ろうとする事は、子ども理解とすることができるだろう。A氏は目の前の子どもから保育実践を作っていたのである。

IV. 結論

A氏は保育士資格を取得する前に、共同保育所を立ち上げ、保育実践を作り上げていった。A氏が共同保育所を立ち上げていくための理由は、子どもへの視点よりも、社会問題として、女性の社会進出とそれに付随する保育所づくりが存在していた。社会進出をしたい女性と、子どもを産むと自然と社会進出が絶たれる現実の中で活動していた。A氏がしていただろう子ども理解は、「子ども」という存在を、社会の中でどのように理解を

して、その子どもたちの現実から保育実践を組み立てていくことで「子ども理解」を行っていたのではないだろうか。

また、A氏が活躍する時代は、集団主義保育、集団保育という言葉があちらこちらで語られている時代であり、集団の中の子どもという視点があり、集団の中での子ども理解ということも考えられる。

社会の大きな流れ、保育にかかわる人たちの関心ごと、当時の流行など様々なものに影響を受けながら、子どもと向き合い実践を行ってきたA氏。雑誌の取材に対してこのように話をしている。

子どもには家庭保育も集団保育も大切ですけどどちらも一生懸命、自信を持ってやっていて、その中で子どもの中にひそむすばらしい力を、どうやって引き出すか率直に話し合い、学び合っていきたいと思うんです。母親だけでなく、父親とも話したい。働く母親への理解と同時に、子どもたちにとって、集団保育がたいせつなんだっていうことを理解してもらいたい。(わたしの赤ちゃん3月号)

乳児にとって集団保育が理解されていなかった時代に、乳児の集団保育の必要性、たとえ乳児であっても、一人一人の子どもを持っている能力を可能な限り伸ばしていける、集団保育を通して子どもを理解していたのかもしれない。

V. 文献

- 青木久子.(2001).はじめに.青木久・間藤侑・河邊貴子.子ども理解とカウンセリングマインド 保育臨床の視点から.(pp1-4) 萌文書林.
- 桐畑寿太郎.(1974).赤ちゃんのために生きる人々 ⑤.わたしの赤ちゃん.(pp90-95) 主婦の友社.
- 小出まみ.(1992).つかまったって泣かないよ いっしょにあそぶなかで育つ自我と社会性.ひとなる書房. .
- 村山祐一.(1979).幼稚園と保育所の制度と現状. 宍戸健夫・田代高英(編)保育入門(pp.215-232)

有斐閣.

諏訪きぬ. (1970). 「働く婦人と保育所づくり」. 季刊保育問題研究 32 (pp1-14) 新読書社.

鷲谷善教. (1966). 私たちの保育政策. 文化書房 博文社.

謝辞

インタビューや多くの貴重な資料を提供して頂きました A 氏に心より御礼申し上げます。

付記

インタビューの実施、本稿の作成にあたり、JSPS 科研費 18K18615 (研究代表者：北海道大学 川田学) の助成を受けた。

